

## 資料の輪に加わる

中村 大地

わすれん！にアーカイブされている映像や資料をとにかく見てほしいという依頼を引き受けた。はじめに断っておくと筆者は演劇の作家・演出家であり、メディア研究者でもなければ映像作家でもない。映画は人並みには好きだけれど専門的な知識はなく、多数の資料をこうして一度に見るのははじめての経験だった。

自分の立場を先に説明しておいたほうがよいと思うのでそうする。2010年、大学入学をきっかけに仙台へ移住し、2011年3月11日当日は大学病院近辺で被災した。大学一年の春休みだった。自宅の部屋はめちゃめちゃだったし、電気や都市ガスが止まったけれどそれだけで、さしたる“被害はなかった”。直後も含めボランティア活動をした経験はまったくなく、沿岸部を最初に訪れたのは震災から五年が経ってからだった（そしてそれは、しばらく自分にとって恥ずかしいことだった）。学内外問わず演劇の作品づくりにあけくれ、卒業してからも含めると丸々八年仙台に暮らし、今は実家のある東京に戻っている。メディアテークにはよく通い、毎年企画展を楽しみにしていたし、なんなら最後の二年は、それこそわすれん！の利用者向けに撮影機材を貸し出したりするアルバイトとしてメディアテークに勤務していた。そして、自身のつくった東日本大震災を題材とした演劇作品の映像（『とおくはちかい(reprise)』、『ここは出口ではない』）を収めることをきっかけに、遅ればせながら2020年、わすれん！の参加者となった。

そういう環境にいたものの、恥ずかしながらわすれん！の膨大な資料群にこんなにたくさん、意識的にふれるのは初めてだった。スタッフの方から共有された映像を様々な状況で観る。電車で移動の最中にスマホで、あるいはご飯を食べるときに、インタビューが中心の映像はラジオ的に作業の脇で流してみたり、当然腰を据えてじっくり見たものがたくさんあった。最初は、見知った街やお世話になった方々の十年前の姿に、おっ、と目が止まったりもした。仙台市内の震災直後の様子を収めた映像が、予想以上に自分自身の当日の体験を鮮やかに蘇えらせ、観賞を中断しなくてはならなかったこともあった（木町のSEIYUの長蛇の列に僕もいた！）。しかしだんだんと、何本も何本も映像を観続けていると、個人的な思い出とは関係なく身体に映像が染み込んでくるというか、文字通り視聴者としての自身が映像に“潜って”いく感じがしてくる。“潜る”という言葉が持つ映像ひとつひとつを深掘りして紐解いていく、というニュアンスよりは、たくさんの映像の海をぼんやりと“漂っている”というのが感覚的には近いかもしれない。それは、いくつかの映像資料に特徴的な、何を映すでもなくカメラとともに被災しているまちを漂う撮影者のあり方に大いに影響を受けているのかもしれない。撮影者と共に、あるいは隣に立って、被写体の話を聞き、風景を浴びる。すると、だんだんと漂っているような感覚になってくる。

震災十年にタイミングを合わせるように、数年前から宮城や福島、岩手の沿岸部には震災遺構や、資料館などの伝承施設が一般の方にも見学可能なものとして次々とオープンしている。残された映像資料の多さもあってのことだろう、筆者が訪れたいいくつかの施設では映像が展示の中核を担ったり、展示全体に対する導入の役目を果たしたりしていた。そうした映像には、津波や原発事故の恐

ろしさを示すものの他に、どんな被害を受けたかを語る「被災者」の姿が映っている。そのことをどうこう言いたいわけではない。一方で、わすれン！にある映像の中で筆者の印象に残ったのはこうした映像とは対を成す、ごく私的な映像群だ。

杉本健二さんによる『過去を見直して、今を見つめる』（2013）は、大学の同級生の運転で石巻の実家や女川を案内してもらい、震災から一年ほど経過したある一日を記録したものだ。同級生は、母校だった大川小学校に立ち、野球チームに入っていたこと、ちびっこ相撲で準優勝した思い出を語る。「今だったら勝てるね」と杉本さんが言うと、彼は「いや、そいつは今130kgくらいあっから」と返す。優勝の座を争ったもうひとりの友人は津波で亡くなった。そいつと一番仲良かったんだ――ぼそと、同級生は言う。見ているわたしは、杉本さんと共にそうした事態ひとつひとつに直面していく（ように感じる）。実家でおばあさんのつくった昼食を食べ、話を聞く。実は、同級生が一番下の妹を津波で亡くしており、それがあの大川小学校で起こったということ、遺族として家族は現在も裁判で係争中であることが次々と明かされていく。この時視聴者は“大川小裁判を起こした遺族の〇〇さん”を見ているのではない。あくまで目の前に映る友人が、大川小学校の卒業生であり、一番下の妹さんが亡くなっており、家族は遺族として裁判で争っている、という順序で状況を理解する。両者は身体感覚としては強烈に異なる。彼らの関係はどこまでも被写体と撮影者であるが、それ以前に大学の友人同士だ。この関係性でしか映らないものが映像にはたくさん残っている。

もうひとつ。岩崎孝正さんの『村に住む人々』（2014）は、2011年3月の発災からほどなくして、撮影者が故郷である福島に戻ったときから2014年5月までのあいだ、途切れ途切れにそこで暮らす友人や家族の様子を撮影したものだ。岩崎さんの話の聞き方は、こういってはなんだがちょっと雑で、失礼な感じがする。お兄さんがマスクをしてでかけるところに、「なに、それは被爆対策？」と聞く。兄は「そうだよ！」とぶっきらぼうに返す。「泣き叫んでる人がいたけど、ああいうのは日常茶飯事？」と僧侶である父に聞く。「そうねえ、やっぱり若い人亡くなると…」と父が返す。もちろん、土砂にまみれた瓦礫や、あるはずのないところに打ち上がった漁船を前に「自分の住んだ街が、何も失くなってしまいましたねえ…」と、カメラを回しながらつぶやくその声から、岩崎さんの想像を絶する心境もまた、強く感じ取ることができる。その上で、被写体である家族や友人たちは、撮影者である岩崎さんのことをよくわかっていて、その関係性だからこそ、少し無遠慮な質問に応答する。「遺体はどうやって見つけてくの？車で走って？」「車で見ながらなんて見つかんねえべ、最初のうちだけだ、そんなん」と笑われる岩崎さん。家の跡を訪れた友人に「しんちゃんはさ、なに探してんの？」「なにってはないね、なんかじぶんちのもの」「こっから？なんか、宝探しじゃないけど…」とだまる岩崎さん。「なかなか見つからないと思うけど」流されてボコボコに壊れた軽トラックが、しんちゃんのものだとわかる。

ここで言いたいのは、この態度であるからこそ聞いた話があるのだ、ということではなく（もちろんそういった面は絶対にあるが）、あくまでもこうした関係性が映像として残されているということだ。先程の杉本さんの映像になぞらえて言えば、“遺体捜索をする消防団の人”に話を聞いているのではなく、岩崎さんの友人が消防団の人で、津波の跡から遺体を探しているのだ、という話を聞いているということ。これらは、もしかしたらホームビデオになってしまったかもしれない、あるいはVlogとしてTwitterやInstagramなどのSNSや、Youtubeといった動画配信サイトの海に

放り出されてしまったかもしれないごくごく私的な映像だ。こうした映像が、わすれん！というコミュニティ・アーカイブの存在によって、編集され（完成のため編集に協力したスタッフがいただろう）、半永久的に残り、誰もが触れることのできる状態になっているということ。とても稀有なことだな、と思う。

こうした映像を見ていると、“あの日”の解像度が上がるような気がする。自分以外の誰かが、誰かも、誰かと過ごしていたこと。大きな言葉で括られてしまう出来事の渦中には、ひとつひとつの生活があるという当然の手触りがあり、その膨大さに途方に暮れる。解像度が上がっていくことで、自身と“あの日”との間がゆるやかに、地続きにつながっていく。それは他の、たとえば戦争体験や、別のまちで起こった大きな水害や地震などの災厄であっても変わらないだろうと思える。大文字の“被災者”ではない生活者を取りあげた記録群は、こうやって出来事を捉えるための入り口になってくれる。

「ダイブわすれん！」は「これまで蓄積されたわすれん！の資料の海に潜る＝ダイブすることから、これからの資料の利活用について考える取り組み」だそうだ。たしかにひとつの資料ではなく、多数の資料を浴びたことで発見できることは確実にある。とても気力や体力の削がれるハードな、仕事でなかったとしたらやれなそうなことではあったけれど。

多数の資料を浴びるのは別のやり方で“潜る”人々の記録も、わすれん！のなかにはあった。福原悠介さんと島津信子さんの『飯館村に帰る』という作品に音声解説と日本語字幕をつけるボランティアの様子を収めた『震災記録を見る、読む、囲む —『飯館村に帰る』バリアフリー上映の記録—』を紹介したい。彼/彼女らは何度も何度も映像を確認しながら、音声や字幕をどのようにつけて、視覚や聴覚障害のある人々へこの“映画”を伝えるべきなのかを話し合う。ボランティアの方々は言う。「最初はなんてじれったい映画なんだろう、どうしてはっきり物を言わせないのだろうと思ったけれど、何回か観るうちに、観ている側が気が付かなくてはいけない映画なんだと、遅まきながら気が付きましたね」「被災者の方の記録ということで、少し暗いというか悲しいイメージを持って観たんですが、直接震災と関係のないお話が結構多いというのが素直な印象でした。何度か繰り返し観ていくうちに、震災/被災者という切り口で観るのは少し考え方が変わってきたなと感じています。」繰り返し映像を観る中で、電線の上まで伸びる大木を見つけるなど、映画が滲っていた肌理に気がついていく。何度も丁寧に見返すのは、音声解説や日本語字幕を制作するという具体的な“作業”のためだった。それは、多数の資料を浴びるという“仕事”で私が観たことと同じように、映像の内側へと潜る経験になっていく。“潜る”というのはそういったニュアンスを含み込んでいる。反対に言えば、“潜る”ためにはなにかしらの作業や仕事を通じて、イチ視聴者ではなく、ある種動的な、いわば参加者のような立場になる必要があるのだろう。参加する、という言葉は少々ハードルが高い気もするが、それを暮らしの一部に組み入れていくことでもある。その度合はきつと大小を問わない。何年かに一度でもいいし、もしかしたらたった一度でも良いのかもしれない。なにかしらの形で参加していくこと。それが“あの日”と、さらに言えばその他の様々な災厄と、忙しい生活を地続きにつないでいくための方法なのかもしれない。なんだか当たり前のことを書いてしまったけれど、そんなことをひとまず、今は考えている。